

ライマン雑記(16)

副見恭子¹⁾

ライマンと助手たちⅤ 安達仁造と桑田知明

1. 安達仁造

明治13年(1880)7月, 桑田知明と安達仁造が秋田県阿仁銅山へ出発する際, ライマンは銅山指導監督アドルフ・メツゲル宛の紹介状を手渡した。離日を年内に控え, 助手と使用人たちの行く先を案じ, 奔走していた頃である。安達は, 書記として働いた以外は, さして地質調査の経験がなかったが, 桑田の助手として, 阿仁銅山へ行くことになった。ライマンが, 「私の下で, 政府の書記として約7年間住み込みで働いた。利発で誠実な彼を失うのを非常に遺憾に思う」と珍しく心情を吐露している。

ライマンは, 明治6年(1873)2月22日付の第2信で, 早くも父に安達について語っている。彼は青雲の志を抱いて江戸にやって来た若者の一人で, すでに開拓使外人教師館でハウスボーイとして働いていた。ライマンの日本語をマスターしようとする意欲と, 安達の是非とも英語を習得したいという熱意が合致し, 彼は早速ライマンの^{ボーイ}従者となる好運を掴んだ。「3年前, インドパンジャブで油田調査した時, インド青年コペルとインド語・英語の交換レッスンを行ったが, 安達は彼よりずっと勤勉で賢く, 教養がある」と述べている。これは新しい知識や技術を求めて, 新政府所在地江戸に集まった青年たちの一般的な知的レベルではなかったろうか。

安達は, 賀田貞一より3才若く, 山際永吾・杉浦譲三と同年で, 20才であった。松江藩の医者の子で, 和漢に通じていたが, 開拓使仮学校で学んだ助手たちのように, 洋学を学ぶ機会に恵まれず, 初めてライマンからABCの手解きを受けた。1875

年に行われた第3回北海道地質測量調査に, 書記として初参加し, 以後ライマンの全国油田地質調査に随行した。7年間ライマンの家に住み込み, 私的にいろいろ世話になっている点から, 師弟関係よりも主従関係であったのではないかと思う。

安達は, ライマンに岩石の鑑定について教えるを請うため, 1880年12月30日に阿仁銅山を出立し, 函館に出て汽船に乗り, 翌年1月27日に横浜に着いた。ライマン離日後すでに1ヵ月以上が過ぎていた。事実を知った彼の悲嘆は, 次の手紙で伺うことができる。

「……日本へ御渡海ノ最初ヨリシタガヘツカマツリ殆ント八年間ハヘダテナク 父兄ノゴトクネンゴロニ ヲロカモノヲステズ 御教諭クダサレソロ^{コウワン} 洪恩ハ 山ノ高ク 海ノ深キガ如ク ナカナカ^{ツクナキ}拙文ニテ記シ難ク 一生コツズイニ刻ミ^{キザ} 忘却ツカマツラズソロ」とライマンを思慕し, 「比度ハ実ニ良師ニ離レ暗夜ニ燈灯ヲ失セシ如ク 大ニ失望困却仕ソロ」と2月4日付の手紙で彼の心情を綴っている。



第1図 安達仁造と家族(山際永三蔵).

1) マサチューセッツ大学図書館ライマンコレクション委員:
8 Eaton Court Amherst, MA 01002-2828 U.S.A.

キーワード: ライマン, 安達仁造, 桑田知明

2. 渡米

賀田貞一の渡米目的は、ライマンと共に「日本油田之地質及ヒ地形図」を完成し、アメリカの地質調査実地見学で、彼はそのため費用を整え、少なくとも一年半は困らないよう周到な用意をして、太平洋を渡った。安達は、日本で仕事容易にみつからず、アメリカに彼の将来の夢を賭けようと、ライマンを頼って渡米した。彼は1883年5月、阿仁銅山を辞め、桑田知明と共に東京へ帰り、6月に工部省を辞した後、半年以上失職者の辛酸をなめた。

最近、地質学史研究家山田俊弘氏から、桑田知明著「波瀾重疊の五十年」のコピーをいただき、貴重な真相を得ることができた。彼は、阿仁鉱山の経営改革の意見を工部省に提出したため、けん責罷免となっている。安達も同時に職を失ったのであろう。桑田との縁は続き、二人はフィラデルフィアで再会する。

安達は、1884年4月22日、サンフランシスコに到着した。当時のアメリカは、マーク トウェーンが称した「金ピカ時代」で、資本主義が急激に発展し、資本家を代表する“持てる者”と、東は支那、西はヨーロッパからと雲霞の如く流れ込んだ移民労働者を代表する“持たざる者”の2階級が厳然と存在し、彼は度胆を抜かれた。ノースハンプトンのライマン家を訪ね、1週間程赤レンガの家に滞在し、5月の初めに、ライマンに連れられてフィラデルフィアへ向った。

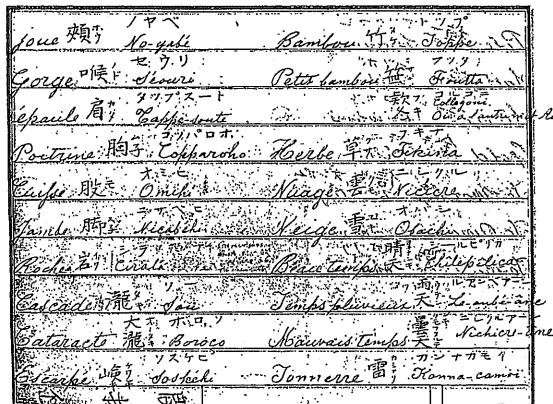
およそ1ヵ月後に、スクラントンにある地質調査現場から安達が書いた最初の手紙が、ノースハンプトンのライマンの許に届いた。書面では、まずライマンに感謝し、ついで仕事を元気でやっていると述べているが、「仕事が厳しく、英語がわからないので人の笑ぐさとなり、友達が殆どないので、時々日本へ帰りたと思う」と歎き、「是非ライマンの配下で働きたい。できれば知的な仕事をしたい」と切願している。

安達のボス フランク・ヒルは、彼に辞書をプレゼントし、親切にしてくれた唯一の人物であった。その彼でさえ、6月中旬、アシュバーナーが安達の実務能力評を求めた時、彼が勤勉・誠実・利口であるとほめたが、英語の理解力に乏しく、行動が緩慢で、若いアメリカ人を雇った方が能率的だと率直な意見を述べた。2ヵ月程ノースハンプトンで勉強し、

安達に英語の自信がついた頃、月10ドルでフィラデルフィアの事務所で働くのはどうかと、アシュバーナーが提案したが、安達がノースハンプトンに戻った記録はない。7月には、桑田知明が甥権平を連れ、ライマンの家に寄宿していたので、それどころでなく、自然に立ち消えになったのであろう。

3. 桑田知明

今津健治著「B・S・ライマンの弟子たち」(注1)によると、桑田知明は弘化4年(1847)5月生れとあるが、「明治13年5月8日 平河町先生ノ宅ニテ写真」の添書では嘉永2年(1849)5月1日になっている。前述の「波瀾重疊の五十年」を書いたのが81才の時で、「石炭時報 第2巻第11号」が1927年に発行されているらしいので、添書の生年は間違いとみてよいであろう。このような些細な点はともかく、彼が近代国家胎動期に江戸で生まれ育ったのは、僥幸だった。彼の実父村松立斎は、越後新発田の藩臣であったが、江戸に出てきて、深川で開業していた。この父から大きな影響を受けた。村松はアイヌに種痘を接種した最初の人である。北海道第一回地質調査中、ライマンは、桑田が書いたテキストを用いて、暇をみてアイヌ語を学んだ。「千歳アイヌ単語」を見ると、“Bambou 竹(タケ), Toppe(トップ)” “Petit bambou 笹(ササ), Foutta(フッタ)” “Pole, 棹(サヲ) Saccoumachi(サックマシ)” “Foot, 足(アシ)” “Kemaha(ケマハ)” とフランス語または英語-日本語-アイヌ語の順で、ふりがながあり、一目瞭然でわかりやすく、ライマンには重宝だったに違いない。桑田は蕃書調所と、明治にな



第2図 千歳アイヌ単語(フィラデルフィア自然科学院図書館蔵)。

って名が変わった開成所で、フランス語を習得し、後更に改称された大学南校で、フランス学を教えた実力を持っていた。

明治4年(1871)に実父が死去し、新発田に戻って洋学校を設立しようとしたが、計画がうまく行かず、またフランス留学の夢も破れ、明治5年に開拓使仮学校に入学し、翌年、第一回北海道地質測量調査に加わった。

ライマンと出会い、彼の人生は一転する。桑田著「來曼先生閱歴概要」で述べているように、ライマンは地質測量調査についてだけでなく、開墾の実況・地味の良否、樹林の厚薄、水力の利用、天気予報の必要性等を助手たちに教え、さらに道路の開通、学校の設置、外資の輸入等の新知識を紹介している。桑田は、画餅に過ぎなかったルソーやモンテスキューの近代思想の本質を、ライマンを通して体験し、自然科学と社会科学に裏付けられた新文明に衝撃を受けた。

1883年工部省を罷免になった後、桑田は長い苦難の道を歩く。彼が明治政府の非能率に愛想を尽かし、自分の才能をフルに用いてくれるなら、何処で働いてもよいと決断したのは、自由人桑田らしく、後年自分で選んだ道に悔いはなかったであろう。

4. 苦難

「波瀾重畳の五十年」のおかげで、桑田がライマンの助手として、月75ドルの申し分のない給料で働くため、渡米したことが判明した。彼は妻と子供3人を残し、留学する14才の甥権平を伴い、安達に3ヵ月遅れてアメリカに旅立った。しかし、7月にノースハンプトンに到着すると、新大統領下の政府が、ライマンの参加する地質調査計画を取り消した報告が待っていて、彼の言う通り「邯鄲一睡の夢」となった。けれども、久しぶりに民主党出のグローバー・クリーブランドが選出された大統領選挙が、桑田が渡米した4ヵ月後の11月に行われている点と、ライマンに書いた7月3日の手紙で、安達が「もし桑田があなたの手紙を誤訳したため、アメリカに来るなら、本当にお気の毒です」と記している点で、彼の渡米目的は疑問の余地があると思う。

安達は、彼の仕事と英語能力の酷評に奮起し、ライマンから毎月5ドルを借りて、英語レッスンの費用に当て、月15ドルのきびしい毎日を過ごしてい



第3図 助手たちが泊ったライマン赤レンガの家(現在スミス大学寮)(鈴木尉元氏撮影)。

た。11月中旬、ライマンは、安達と共に働いているジョン・ブラナーから「日本油田之地質及ヒ地形図」の礼状をもらった。その手紙で、「安達が重い測量器械を担いで、我々調査員を追って、いばらや岩、倒木の間を縫って進むのは、並大抵の苦勞ではないが、彼の不平を一言も聞いたことがない。極限にまで疲れた時ですら、夜間の英語の勉強の時に、注意力が散漫な程度だった。」と超人的な忍耐力をほめている。

1904年の秋、スタンフォード大学副学長ブラナーがライマンを訪れ、二人はペンシルベニア地質調査の昔話に花を咲かせた。安達の名が出ると、「ずいぶんきつい思いをさせたが…」と追憶し、約20年の時の流れにかかわらず、不撓不屈の態度でやり通した安達を鮮やかに覚えていた。

一方、桑田はライマンの家に翌年4月まで滞在したが、その間の記録は殆どない。ノースハンプトンを去って、しばらくの間、ライマンに書いた手紙の末尾に、「Master Tokumatsuによろしく」とあるので、徳松を師として、10ヵ月余り、彼は英語をみっちり磨いたのではないと思われる。

1885年4月30日、桑田はフィラデルフィアを訪れ、第2次ペンシルベニア地質調査の事務所で地形図作成の仕事を手伝ったり、使い走りをしていた安達に会い、彼の下宿に一週間泊った。そこから、大製鉄工業都市ピッツバーグに行き、民間事業に携わる技術者の下で働いた。10月16日の手紙で、ライマンに「家族がいなければ、長くいるのだが」と書き、渡英の決意をしたようだ。後年彼が語った「ア

レゲニー高台で天然ガスが噴き出て、石炭の需要が激減し、炭鉱業界にパニックを来たし、各所にストライキが起ったので、アメリカ炭鉱視察をあきらめ、英国炭鉱の視察に赴くことにした。」という理由もうなずける。

12月19日、ニューヨークを出帆、28日に目的地のニューキャッスルに着いた。英国では、ライマンに郵便為替30ドルを頼んだりして、お金の事欠いた旅を続け、1886年5月、約2年ぶりに帰国を果たした。

安達にとっても、1886年は苦難の年だった。月給が30ドルに上ったが、ライマンに返済できず、将来の希望なく、体調を崩し、夏だけでも転地するよう、医者に命じられ、彼は帰国すべきか否かの窮地に立ち、ライマンに憤懣を打ちまけた。「英語の勉強を目的に渡米したが、授業料が余りに高い。民主主義国家と言うが、実際は差別があって、殊に貧しい東洋人にはひどい。給料は最低でどれい扱いだ。しかし…」と続け、彼のアメリカで得た教育と経験が、輝かしい将来を約束するのを、決して疑わなかった。その手紙で、「長老教会から日本派遣の伝導師にならないかとの話がある。もし承知すれば、無料でここで6年間学ぶことができる。如何だろうか。」とライマンに尋ねている。無神論者ライマンはどう答えたのだろうか。やがて安達は、ライマンの勧めた運動で、活力を取り戻し、彼の借金増額の申し出を断り、雄々しく立ち上がった。

5. 全道地質鉱産調査

「ライマン先生に早く知らせたいが、多忙で、英語で書く暇がなく、また時期尚早と思うので、北海道地質調査が行われるのを是非先生に伝えて欲しい」と山内徳三郎が安達に頼んだのは、明治19年(1886)の初夏と思われる。ここで筆者は「ライマン雑記(14)」で、北海道地質調査が1887年に開始された」と書いたが、1886年の間違いであったことをお詫びしたい。今井 功著「日本地質学会史年表」(注2)に、北海道庁・1886、「山内徳三郎を主任とする全道地質鉱産調査」と明記してある。改めて、この調査名を用いる。

1月26日に北海道庁が設置され、殆ど同時に山内は北海道庁権少技長となり、3月に幌内出張所長に就任した。幌内の仕事が順調に進み、山際永吾と島田純一が発見した幾春別鉱山が開坑され、

Mr. Konoの下に採掘が始まると、山内は小樽内に移り、これから開始する全道地質鉱産調査のプランを立てていた。彼は、ライマンの旧助手たちの協力を切に願ったが、各人現職にあるため、期待できるのは、すでに北海道で働いている前田精明と、英国から帰国する桑田知明だけだった。

ライマンが待っていた最初の調査報告は、英国滞在以来音信不通だった桑田からで、発信地は札幌、日付は1887年1月25日となっている。長い無沙汰を詫び、彼は「昨年8月(懐旧談では5月)に帰国したが、休む暇なく数日後に、ドイツ人農学家マックス・フェスカと神居古潭から上流7里にある川上に行き、調査に従事し、9月には、幌内と幾春別の調査をし、11月に終了した。今年の3月か4月までに地図を仕上げ、初夏には全道の調査をする。」と報告した。

安達は、1886年11月13日に小樽で書いた山内の手紙を受け取ると、英訳して、2月の初めにライマンに送った。桑田と異なり、数字を用いて詳細に説明したり、ライマンのスケッチマップの誤りを正しているのは、如何にも彼らしく思う。山内は、榎本武揚とライマンによって、開発の緒についた石狩炭田に主力を注いだ。何と言っても、報告の中のハイライトは、「北海道で最も重要な鉱産は、金でも銀でもなく石炭だ。」と明言したことであろう。彼は、壮大な宝庫石狩炭田のパノラマを、くっきり描き出していたに違いない。

同書簡には西山正吾の日本全国調査報告の訳も含まれている。「ナウマンパーティーが去って以来、俄然仕事が増え、東北と関東を終え、現在静岡-姫路間を調査中である。来年は、京都府、大阪府、兵庫県等を調査することになった。1888年までに、全日本地質調査を仕上げねばならないだろう。」と記し、西山の燃えるような使命感が伝わる。しかし、彼はどうして翌年農商務省地質局をやめて、全道地質鉱産調査に加わったのだろうか。敬愛するライマン先生と共に、北海道地質調査をしたすばらしい青春時代への思慕が原因なのだろうか。または、地質局に、急激に学閥勢力が拡がり、デリケートな西山は、地質技師蔑視の雰囲気を感じ取ったのであろうか。それとも、単に山内への友情からなのか、はたまた北海道の魅力に抗うことができなかったのか、思い巡らせば、限りがない気がする。

西山は、1887年6月の初旬、札幌をふり出しに、江差・福山・函館を調査し、東進して根室に至り、ライマンが望み果たせなかった択捉島と国後島まで行き、北見・天塩を廻って10月15日札幌に戻った。5日後、再び渡島と胆振を調査し、12月まで働き続ける程の活躍ぶりであった。

第3回全道鉱産調査をひかえ、12月に坂市太郎が農商務省から北海道庁に移ったニュースが、安達に入った。坂は、北海道庁入りして、約半年足らずして、翌年5月に夕張奥地のシホロカベツ川上流で、石炭の大露頭を発見している。周知のように、日本の代表的な大炭田発見の端緒である。

桑田が、4月に札幌で1888年の全道地質鉱産調査の命令を待っている間に、ライマン宛にしたためた手紙を最後に、調査報告は、ポツンと糸が切れたように途絶えた。この原因は、ライマンが第2次ペンシルベニア地質調査に加わったので、山内と西山の報告や坂の大夕張石炭山の発見の情報を、安達から直に聞いたからではないかと思うが、桑田の英文の手紙が存在しないことの原因が説明できず、疑問が深まった。

もう一度「日本地質学会史年表」をチェックすると、1883年の欄に「北海道庁、神保小虎を主任として全道地質鉱産調査」(注3)と記してある。神保はライマンの北海道調査を学術的でないと非難し、神保-坂論争を巻き起こした人物として知られる。山内が1887年4月に、北海道庁第2部地理課長となり、翌年3月第2部林務課長を兼務し、9月に第2部地理課長を辞職しているのも、一つの暗示を与える事実ではなかろうか。その後、彼は、1896年に榎本武揚が農商務大臣になるまで、本来の地質業務から離れることになった。

最後に桑田の「波瀾重畳の五十年」から、少し長い、引用する。

「…、明治十九年の秋、北海道庁の四等技師として、又々私は役人にと逆戻しては見たものの、元々私の気質に合わない官業の事として、三年の後とうとう民間に下った。其頃は未だ官尊民卑の気風が一世を風靡して居て、民間事業に携はるなどは男子の恥ででもあるやうに思われた。」(注4)

リベラリスト桑田知明は、「何も技術に官民の差別ある筈なく寧ろ他人の餘り喜ばない民業を興す



第4図 桑田知明と家族。(山際永三蔵)。

事は却って国家の爲めであると考え」(注5)、北海道鉱山会社の一技師として民間に入った。

6. 成就

渡米3年目の1887年4月、安達は34才の誕生日を迎え、10年以上も会っていない母親を思い、自分の行く末を改めて考えた。彼が頼んでいた三菱からの就職の断り状を、ライマンの家に集まるフィラデルフィアの日本人留学生の一人岩崎久弥から手渡され、現実の厳しさを痛感した。「西山が岩崎の話が駄目でも、日本に帰ってくれば、60-70ドル位の職が見つかると言っているが、もしペンシルベニア調査事務所が、給料を50ドルにしてくれれば、もう少しここで英語を磨きたいと思う。先生の意見をできるだけ早くいただきたい。」とライマンのアドバイスを求めた。彼は、帰国を促されれば、すぐにも、カナディアンパシフィックで、サンフランシスコへ立つつもりだったようである。ライマンは、西山が安達の滞米経験を過大評価しているのではないかと案じ、「しばらく様子をみたらどうか。」と再考を勧めた。続いて彼は、安達のボス フランク ヒルの手紙を受け取った。「安達の渡米の目的が叶えられず、失望しているのを同情します。しかし、彼の地質調査の経験は、専門の域に達しておらず、将来良くなるとも思えません。生活は苦しいに違いありませんが、増給は殆ど無理でしょう。彼の求める地質技術を、この現場ではえられません、と言って、大学でコースをとるのは実際的ではありません。留まるか、帰国するか二者択一を迫られれば、私は後者を勧めます。」と彼は直截な意見を述べた。

2

安達書簡

四月十八日附ノ御手紙アリカタク拝見シテ
 誠野徳一郎氏ハモヤシク京マシク圖書判ノコトハ
 細野氏ニテ後夜ニ返事イタシマス
 未息先生ノ四補助手於老名トモ健康ニアリマス
 此春第十議會後榎下衆勲務大臣辭職ト共ニ山内徳
 三郎長辭職シテアソトマス○山内、西、前田三人官
 夫ナリ 山田杉浦、安達(賀田)ハ奉公人ナリ 桑田政氣人
 ハ礦也 所ナリトスリハシ奉公人ナリ 細垣老人ハ礦主ナリ故
 桑田、細垣政三人ガ金持ナリマセウ山内賀田前田三人
 アリトモシロカラス

私半達仁造ハ昨年八月日赤郵私會社改革ニ勝野鑛三
 ラ古河市兵衛我賣渡タルニシテ古河炭田部長トナリ月給莫向
 円外カニ歳余千富アリ當時ニテ所執業中ニテ多ク代ナリ
 私小兒ハ女子二人男子二人合テ四人ニテ勝子六歳、
 鉄多初ハ歳標子三歳、鐵治一歳アリ
 二向英文ノ手紙ヲ認ルコトメンドウニテ御然御休ニテ
 マシタ ヒール氏スミス我其他ノ諸君ニ宜敷御礼ヲ願フ謹言
 勝野炭山
 安達仁造

未受先生
 四年

1

安達書簡

四月十八日附ノ御手紙アリカタク拝見シテ
 誠野徳一郎氏ハモヤシク京マシク圖書判ノコトハ
 細野氏ニテ後夜ニ返事イタシマス
 未息先生ノ四補助手於老名トモ健康ニアリマス
 此春第十議會後榎下衆勲務大臣辭職ト共ニ山内徳
 三郎長辭職シテアソトマス○山内、西、前田三人官
 夫ナリ 山田杉浦、安達(賀田)ハ奉公人ナリ 桑田政氣人
 ハ礦也 所ナリトスリハシ奉公人ナリ 細垣老人ハ礦主ナリ故
 桑田、細垣政三人ガ金持ナリマセウ山内賀田前田三人
 アリトモシロカラス

第5図 安達書簡 明治30年5月31日(ペンシルベニア歴史協会蔵)。

7月末、ライマンは、第2次ペンシルベニア地質調査の2年契約にサインし、ポッツビルの現場に到着した。間もなく、フィラデルフィアから安達が参加し、帰国の話は途絶えてしまった。

翌1889年5月18日、安達はニューヨークを立ち、英国とフランスを訪れ、7月26日に帰国した。11月に、山際永吾の紹介で、福岡県鞍手郡にある日本郵船会社所有の勝野炭坑を経営することになった。仕事が軌道に乗り、勝野に落ち着くと、翌年10月結婚し、ライマン先生と知り合いになる喜びと、永久に、夫と共に恩顧に浴したいとの願いを、きれいな英語で書いた新婦安達芳子の手紙を添え、ライマンに彼の慶事を知らせた。やがて、彼の配下は約6百人に増え、鉱業組合名誉会長の役を頼まれ、大いに活躍し、明治30年(1897)に、勝野鉱山が古河市兵衛に売渡された後は、古河炭田部長として手腕を振った。個人的にも、5人の子供に恵まれ、

豊かな家庭を築き上げ、ポッツビル時代の夢が実現した。

60才を過ぎると、安達はライマンに英語で手紙を書くのが億劫になり、時々息子に代筆を頼んだ。あれ程、英語をマスターしようとした彼の努力が、空しい結果となったが、滞米5年の経験は、後半の人生のバックボーンとして残ったと思う。東京の築地にあるミスターサマーズ学校を卒業した新しいタイプの妻芳子に、親身になって世話をしてくれたフランクヒルの母の面影をみたかも知れない。フランクは厳しくて率直なヤンキーだったが、彼の上下の隔てのない、国や人種を越えた人間愛が、安達の絶望した心を、しばしばいやしてくれたのを忘れなかったであろう。

桑田知明は、1890年の春、札幌から東京に戻って以来、孤高の人として、長い苦難の道を歩かねばならなかった。常盤炭田の磐城と日立炭坑調査

の後、越後油田調査に従事したが、彼の炭鉱への熱情は失せず、1895年に、Shiramidzu炭鉱の所有者となった。2年後、ライマンは甥桑田権平から、叔父知明が遂に炭鉱の開発に成功し、事業が拡大し好況なのを聞き、我が事のように喜んだ。大正7年(1918)に、有志と共に大日本炭鉱を創設し、野に下ってから、約28年の月日を経て、初志を貫徹した。ライマンに送った4月18日の手紙で、安達は「戦争(第一次世界大戦)で、一般国民の生活は非常に苦しいが、個人企業、殊に石炭業が景気が良いので、炭鉱主桑田と坂(市太郎)は大満足であろう。」と述べている。

自由人桑田は、晩年に至り大成した。彼は助手たちの中で、最後の存命者となり、「来曼先生履歴概要」を書き上げた。昭和12年、桑田権平著「来曼先生小伝」が発行され、桑田知明遺著「来曼先生履歴概要」の抜粋が附録として掲載された。

……、実に四十餘年間師弟の温情厚く、互に間断なく起居動静の安否を顧慮し、親子も暫なら

ざる交情ありしを以て、異郷の人には稀に見る所なり。

而して斯^{しか}かる長年月の間先生より享^うけたる薫陶中、技術上の好果は勿論なれども、寧ろ人格上根本的尊重すべき行爲に於ける感化は一層優大にして、其効力^{その}虧^{すく}ならず、終生忘る可^べからざる恩人なりとす。(注6)

以上は最後の2節からの引用で、かなは筆者が付けたものである。

注1) 今津健治(1979): B・S・ライマンの弟子たち-修業時代, エネルギー史研究 10 p.101

注2-3) 今井 功(1993): 日本地質学会史年表, 日本の地質学100年 日本地質学会 p.592

注4-5) 桑田知明(1927): 波瀾重疊の五十年 無資力に終始した炭鉱業, 石炭時報 2 pp.1020-1021

注6) 桑田権平(1937): 来曼先生小伝 p.99

FUKUMI Yasuko (1998): A note on Lyman (16)- Lyman and his assistants V.

<受付: 1998年8月12日>